OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	《西蕃譯語》〈川六〉に記録される18世紀木坪チベット語の特徴
Author(s)	鈴木, 博之
Citation	内陸アジア言語の研究. 2007, 22, p. 157-180
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/20648
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

《西番譯語》〈川六〉に記録される 18世紀木坪チベット語の特徴

鈴木博之

1 はじめに

《西番譯語》は明清代に作成された漢語と周辺域の諸民族の言語を対照した語彙集及び文例からなる《華夷譯語》の1つである.《華夷譯語》はその成立年代によって甲・乙・丙・丁の4種に分類され,丁種本《西番譯語》は清朝の會同四譯館の成立(1748年)以後に作成されたものである.丁種本《西番譯語》には少なくとも9種類が存在し,西田・孫[1990]においてそれぞれの概要がつかめる.9種には馮蒸[1981]の分類による番号が与えられ,本稿で扱う木坪のチベット語を扱うものは〈川六〉とされている.ここでは,《西番譯語》〈川六〉のことを便宜的に《木坪譯語》と呼ぶ.

1.1 丁種本《西番譯語》をめぐる問題

丁種本《西番譯語》の内容は計740語からなる漢語と各種民族言語との対訳語彙である.《華夷譯語》は周辺民族から送られてくる来文の翻訳や使節との通事のための教本として作成された経緯があるが,丁種本は事情がやや違っていて,詳細な経緯がはっきりと分かっているわけではないが,現在の中国西南地区に居住している少数民族の言語について,今で言うアンケート調査が行われたという.その事情は西田[1973:8-12, 18]にまとめられており,1748年に乾隆帝の勅諭によってこの種のアンケート調査が行われ,それに必要な臨地調査については,北京から派遣された調査員が行ったのではなく各所轄の機関にアンケート用紙すなわち740語の語彙調査票を配布して現地の担当者が記入したとされる.

そのため，先に成立した乙・丙種本の《西番館譯語》とは性格の違うものであって，丁種本《西番譯語》の研究には，それがいかなる言語を記録しているかということがもっとも興味のある問題となった．先行研究では《西番譯語》9種のうち，〈川四〉のペマ語[西田・孫 1990]と〈川八〉のドス語[西田 1973]が詳細に研究されている．丁種本《西番譯語》の全体に触れる西田・孫[1990:9-42]の研究によって，どの言語を記録しているかということについては，大勢が判明したことになっている．それを追認する記述が西田[2002:254]にある．

《木坪譯語》については，チベット語と非チベット語という観点から見て，西田・孫 [1990:11, 30-32] がチベット語を記録したものと断定した．ところが同書で西田氏が指摘するように，《木坪譯語》に記録されるチベット語には数々の特異点がある．これについて，以降詳細な研究はまだなされていない．筆者は，記録される言語がチベット語であると断定されることは，それが非チベット語ではないという程度の意味合いしか持っていないと考える．つまり，非チベット語を記録するものは，ペマ語であるとかドス語であるとか言語が特定されるのに比べて，チベット語はそれより細かく分類されていないということである．このように考える背景には，現代チベット語方言の多様性が大きく関わっている．丁種本《西番譯語》に記録される諸言語が分布する地域は，だいたい現代の四川省西部にあたる．この地域に分布するチベット語方言は，他の地域に分布するものに比べて極めて複雑かつ多様である．その方言差異は，音体系と語彙形式をとってみれば，1言語に属することを疑うほどである．そのような多様な方言の一種が《西番譯語》に現在より200年程度前の言語形式として記録されていることになるのだから，それがどのチベット語方言に近い特徴を持つか，あるいはどのような系統関係にあるかを示さなければ，《西番譯語》の記録言語が判明したとはいえないと考えるのである．

1.2《木坪譯語》をめぐる問題

西田・孫 [1990:32] において，西田氏は《木坪譯語》の記録言語について「この川六のチベット方言が，カム方言に属する言語であり，中核的な語彙は標準形式を示しているにしても，その周辺にかなり特別な単語形式を保持していたものと考えられる」と評している．

西田氏は《木坪譯語》の中から特徴的と考えられる具体例を取り上げて簡単に述べている．これらの例の中には，確かに《木坪譯語》の言語を特徴づける形式が含まれているが，当時の資料的な制約もあって，方言形式を十分評価しきれていない．また，先行研究が特異点とみなす推定形式には，精査すべき２通りの特徴があることが指摘できる．１つは，記録されるチベット語自体の持つ特徴であり，方言を特徴づける重要な要素である．これが特異点と判断される根拠は，類似の対応関係をもつチベット語が従来報告されていないものであって，よく知られている語形式を持たないものであることによる．もう１つの特徴は，そもそもの語彙形式の推定方法における誤りに基づくものであって，すなわち《木坪譯語》に漢字で音写される形式の再構方法に何らかの問題があるものである．これは後述するように，原因が特定されていて，それは漢字音の推定方法によっている．

以上のような問題点を解決するには，現代チベット語方言の資料が絶対的に必要とされる．たとえ漢字音の問題でもあっても，記録言語と近い関係にある言語の資料が，分析の対象となる言語の解明には極めて重要な役割を果たすことは言うまでもない．

2《木坪譯語》の議論にあたって

ここでは，まず《木坪譯語》の議論を行うにあたって必要と考えられる，《木坪譯語》に付される通用地域を記した序文についての考察を行い，その後本稿での《木坪譯語》の研究方法について述べる．

なお本稿で考察する《木坪譯語》の資料は，西田・孫[1990]の付録の写真「北京大学図書館本」に基づく．西田・孫[1990:373]は，この版本には誤りが多いため原本とされる故宮本を参照するよう勧めている．本稿では《木坪譯語》記録言語の全体的な再構や校訂を目的としているわけではないため，先の指摘にもかかわらず故宮本は参照していないことを断っておく．

2.1 《木坪譯語》の序文

ここでは，《木坪譯語》に記録される言語についての議論に先立ち，参考になると考えられる周辺の事情に関する情報を《木坪譯語》の序文を分析することを通じて述べる．丁種本《西番譯語》には，それぞれの記録される言語の通用域と考えられる地名の一覧が序文としてついているため，それを分析する．

《木坪譯語》の序文の内容は以下のとおり．

> 四川泰寧協建昌道黎雅營雅州府
> 各所轄木坪即董卜韓胡宣慰司堅参囊康所管四十八寨一十八村西番字語均同
> 照依奉頒字書門類次序譯繕如左

《木坪譯語》の名称は，以上の序文に含まれる「木坪」からとられたものであるが，「木坪」は「穆坪」とも書かれ，「穆坪董卜韓胡（宣慰司）」の略称であり，「董卜韓胡」という土司の名称で知られる地域と同一の地域を指している．(1) 「董卜韓胡」という名称は丙種本《西番館譯語》の漢語見出しにも記載され，そのチベット語口語形式から「ギャロンの土地」と記録されている．《木坪譯語》

(1) 雀丹[1995:142]によると，「董卜」が千億の数，「董卜韓胡」はギャロン語の音訳で，「韓胡」は穴，洞，谷の意であるという．筆者のギャロン語の一次資料とあわせて考えると，前者が stoŋ ^{m}bum，後者が $k^{h}a$ ^{ŋ}gak であると考えられる．なお，同書によれば「木坪」はチベット語で多数と発展という意があることから，蔵文 *mang 'phel* の音写形式に対応する可能性がある．

の記録地域である木坪周辺はかつてはチベット文化圏に属し，ギャロンの勢力地域として言及される「ギャロン 18 土司」の 1 つに数えられる董卜韓胡土司の領地であった[楊嘉銘 2005]が，現在では大部分が漢化し漢族が主たる居住民族となっている[《宝興県誌》2000:104]．そして，堅参嚢康は実在の土司の名で，龔蔭[1992:247-248]によると第 8 代にあたる．在位年は雀丹[1995:144]によると乾隆 11 年(1745 年)から嘉慶初(1785 年)と見られる．以上のことから，《木坪譯語》は堅参嚢康が土司であった時期に作成されたと見ることができ，その年代は丁種本《西番譯語》が作成されたとされる時期とも符合する．

そして「各所轄」以下に挙がっている地域である木坪の四十八寨一十八村は，龔蔭[1992:247-248]に見える具体的な村名として四十八寨には達思盧，一十八村には大馬科などがあり，その地域において「西番字語」(ここではチベット人の文字と言語)は等しく同じとある．その指示する地域が現在の行政区分では四川省雅安市宝興県一帯であることから，限定的な地域で通用した言語が記録されていると見ることができる．同地は最近の研究において「川西民族走廊」と呼ばれる地域の中部に相当する．現在居住するチベット族は少数であり，そのチベット族は四土ギャロン語の一種を話している．**[本稿末に宝興県一帯の地図を付す]**

西田・孫[1990]の分析では，《木坪譯語》に記録される言語はチベット語方言の 1 つであるとされ，ギャロン語ではないことが分かっている．その上で，過去に居住していたチベット人もおそらく広い範囲でギャロン語を用いており，チベット語を使用していた話者はおそらく土地のチベット人ではなく，《木坪譯語》の記録言語は当時の木坪すなわち董卜韓胡土司の領地の支配者層の言語であると推定されている．

この状況から，その言語は現代に伝えられることがなかったか，もしくは記録されていないものであると判断できる．すなわち，《木坪譯語》記録言語は未知のチベット語方言と考えて差し支えない．

2.2《木坪譯語》の研究方法

《西番譯語》の研究方法は，それがどういう目的を持って研究するかによって方法論に違いがあるのは当然であるが，記録される言語の形式を推定することを目的とする場合，西田[1963]をはじめとして同氏の一連の《西番譯語》に関する著作において述べられている手順がある．簡単に述べるならば，まず音写漢字の漢字音体系を推定し，その漢字音を用いて音写漢字を分析する．続いて，記録される言語に関わる情報，《西番譯語》の場合はたとえば蔵文や現代に用いられるチベット語など同系統の言語に当然存在しうると考えられる音体系と対照して漢字音写の意図を考察し，最終的に当該言語の形式を推定することができる．

本稿では，以上の方法を踏まえながらも，西田・孫[1990]が行っているように，現代のチベット語形式を出発点として《木坪譯語》を取り扱うことにする．これは，西田・孫 [1990] が《白馬譯語》に記録される形式の推定について，必ずしも上に示した一連の手順によらず，現代ペマ語を活用していることによる．その背景には，ペマ語という新発見言語との関連での考察に加え，丁種本《西番譯語》の成立がそれほど時代的に古いものではなく，現代語からさかのぼって考えることに一定の妥当性があるためであると考える．また西田・孫[1990:7]は，漢字音の推定についても音写漢字音を清代乾隆時代の北京音を用いることを妥当と判断している．

ここで，上に述べたことについて指摘しておかなければならない大きな問題がある．先に述べたように，各《譯語》の作成に携わった，すなわちアンケート用紙に漢字を用いて音写を与えたであろう漢人が各管轄の土地の役人であるということが事実であったとするならば，漢字音を考える際に北京音を用いるには問題がある．調査が行われた当時，丁種本《西番譯語》が記録されていた地域で話されていた漢語は，おそらく現代の四川省一帯に話される西南官話の一種であろうと考えるのが妥当である．

このことが原因で西田・孫[1990]が推定する形式にはやや問題が生じているのであるが，それを正確に判定するのは当時では困難があった．それは，丁種本《西番譯語》に記録されていた地域の現代チベット語方言に関する情報がほとんど未知であったためである．今，筆者は当該地域のチベット語方言について，現地調査によって複数の方言資料を手にしている．つまり，現代ペマ語が調査されたことを背景として研究が行われた西田・孫[1990]の《白馬譯語》の研究当初と状況としてはよく似ていて，今手にしている現代のチベット語方言及び四川漢語の資料を用いれば《木坪譯語》がどのようなチベット語を記録しているかを評価できる可能性が高まっている．

本稿では，《木坪譯語》の音写漢字の読みを現代の四川漢語音で近似して読む．その四川漢語は筆者が現地調査で得たいくつかのチベット族の話す四川漢語音を利用する．地域によって差異があり，それらも適宜参考とし，さまざまな可能性を想定しながら音写漢字の読みを考える．先行研究による現代西南官話音の記録としては楊時逢[1984]があり，現在のチベット族居住地域の方言音も記録している．《木坪譯語》の序文にある地域に最も近い方言としては懋功方言[(2)]があり，１つの参考となるだろう．

本稿の議論は以上のことを前提として行われる．漢字音を以上のように推定した上で，まず漢語音とチベット語の形式を対照しながら推定の容易な形式を調べ，その中で方言特徴がいわゆる音対応として明確なものを抽出し，現代のチベット語方言と比較的近い関係にありそうな方言が存在するかどうかを確かめる．その作業の後，一致するような方言があった場合は，それを援用して西田・孫[1990]が提示した特徴について再検討を行う．

また，依拠すべき漢語方言が(漢語方言自体の歴史的変遷も加味して)未確定であるため，各地域で細かな対応を示す声調に関しては，再構を行うチベット語を含め本稿では扱わないことにする．

---

(2)　現在の小金県に相当する地域の方言である．

3《木坪譯語》に記録された言語の方言上の帰属

ここでは,《木坪譯語》の漢字音写について特に大きな問題を抱えることなく,また蔵文との対応関係から一定の推定が可能な例を取り出して,記録言語のもつ音韻的特徴を割り出し,それを現代語と比較することによって,記録言語のチベット語方言上の帰属を明らかにする.

3.1 漢字音写から見る《木坪譯語》記録言語の特徴

《木坪譯語》に記録される形式のうち,音写漢字と蔵文の対応関係のみに基づいて再構される形式について,筆者のチベット語方言の一次資料から,方言の特徴が極めてよく現れていると判断できる箇所として以下の3点に注目する.

1. 蔵文 -a#/-a' 対応形式

蔵文 -a# または -a' で,かつ語末に来る場合,o で対応するものがある.

川六 / 漢字音	川六 / 蔵文	再構形式	語義
灼 tʂo	skra	*ʈo	髪
索 so	sa	*so	地
莫 mo	dma'	*mo	低い

なお,チベット語におけるそり舌音の再構は,漢語のように破擦音ではなく現代チベット語に広く見られる閉鎖音を採用する.

2. 蔵文 Py- 対応形式

蔵文 Py- に対して一律の対応関係を得ることはできないが,以下のように歯茎破擦音に対応する例が複数確認される.

川六 / 漢字音	川六 / 蔵文	再構形式	語義
初補 ts^{h}u pu	phyug po	*ts^{h}u pu	裕福な
子呂 tsï nyi	byu ru	*tsə rɯ	珊瑚
莫雑 mo tsa	rma bya	*mo tsa	孔雀

3. 蔵文 sh-/zh- 対応形式

蔵文 sh-, zh- には，多くそり舌音が対応する．

川六 / 漢字音	川六 / 蔵文	再構形式	語義
説 ʂo	shog	*ʂo	来る
日 ʐï	bzhi	*ʐə	4

以上に見た《木坪譯語》チベット語の特徴がどのような位置づけを行うことができるのか，現代のチベット語方言の事例から考える．(3)

1. 蔵文 -a# または -a' 対応形式

《木坪譯語》には蔵文 -a# または -a' に対して *-o が再構できる例が複数ある．現代諸方言においてこの対応に類似の対応を見せるのは，「二十四村話」と呼ばれる丹巴県のカムチベット語[Suzuki 2005]，および郷城県一帯のカムチベット語など，局地的な方言に限定される．丹巴県は《木坪譯語》の序文に記される地域の西隣である．以下に丹巴県の Sogpho(梭坡)方言，郷城県の Sagong (沙貢) 方言，丹巴県の南西に接する地域で用いられる Lhagang (塔公) 方言，Rangakha (新都橋) 方言から 2 例対照する．

(3) 方言間の形式の対照は，できる限り多くの地点の資料を示すのがよいけれども，ここでは数種類の方言に限って示すことにする．筆者の一次資料についてより多くの方言を対照しているものは鈴木 [2006b] にある．

川六 / 再構	Sogpho	Sagong	Lhagang	Rangakha	語義
*so	ˋs^{h}o	ˋs^{h}ɔ	ˋs^{h}a	ˉs^{h}a	地
*ʈo	ˋ^{h}ʈo	ˉ^{h}ʈɔ	ˋ^{h}ʈa	ˋ^{h}ʈa	髪

以上に見るように，Sogpho 方言が極めてよく似た対応形式を持つ．また，「低い」の Sogpho 方言形式は ˋmɔː となって，いずれも蔵文から期待される a は現れない．

2. 蔵文 **Py-** 対応形式

この形式が，《木坪譯語》に複数記録される歯茎破擦音の形式との対応をもつ現代諸方言は非常に限られ，現在のところ松潘県のチベット語 [Sun 2003] と丹巴県のカムチベット語においてのみ確認される．たとえば Sogpho 方言で「鶏」(「孔雀」の第 2 形態素にも相当) ˀtso (蔵文 *bya*)，「開ける」ˋˀts^{h}i (蔵文 *phye*) などがあげられる．ほか，「裕福な」は Sogpho 方言の分布地域の対岸で話される dGudzong (格宗) 方言で ˉˀts^{h}ɯw mə の例がある．

そのほか，ダパ語[(4)]における一部のチベット語来源借用語がこの対応をする．たとえば，《木坪譯語》の「珊瑚」の再構形式 *tsə rʉ は，ダパ語 Ngwirdei (紅頂) 方言の ˀtsa rʌ に酷似する．

3. 蔵文 **sh-, zh-** 対応形式

この形式にそり舌音が現れるのは，全体的には香格里拉県 [《雲南省誌》編纂委員會 1998] や松潘県のチベット語などに見られるほか，丹巴県の

(4) 道孚県・雅江県で話される川西走廊諸語の 1 つである．

カムチベット語にも一部の語で対応関係がある．以下に Sogpho 方言，香格里拉県の Nyishe（尼西）方言，松潘県の Zhongu（熱務溝）方言[5]，Lhagang（塔公）方言，Rangakha（新都橋）方言から 2 例対照する．

川六 / 再構	Sogpho	Nyishe	Zhongu	Lhagang	Rangakha	語義
*ʂo	ˋʂʰoʔ	ˉʂʰoʔ	xu	ˋɕʰoʔ	ˋɕʰoʔ	来る
*zʑə	ˋʱʐl	ˊʱʐə	zʑə	ˊʱʑə	ˊʱʑə	4

以上に取り上げた《木坪譯語》記録言語の特徴は，極めて地域性が高くまたチベット語方言を見渡したとしても少数派の対応関係を見せるものである．そしてこれらの特徴および《木坪譯語》序文における当該チベット語の記録地域を総合的に考えると，筆者は次のような現代チベット語との対応関係が得られるものと考えたい．すなわち，《木坪譯語》記録言語は現代の丹巴県のカムチベット語「二十四村方言」と近い関係がある，ということである．

このことについてさらに《木坪譯語》に記録される形式の分析を通して説明が与えられるか，以下で議論していく．

3.2 現代語との関連から見る《木坪譯語》チベット語の特徴

以上の考察において，《木坪譯語》のチベット語と丹巴県のカムチベット語二十四村方言群との関連が示された．次に，上で扱っていないものを中心に《木坪譯語》に記録される形式を，西田・孫[1990]の指摘する特徴における問題点について，現代語との対応関係を重視しつつ分析していく．

以下の議論でチベット語方言を用いる際に，sProsnang（中路）方言を (sP)，Sogpho（梭坡）方言を (So)，dGudzong（格宗）方言を (dG) と略記する．

(5) Sun [2003] による．

3.2.1 音韻的特徴

西田・孫[1990]における《木坪譯語》の分析では漢字音に北京音を推定しているため，明らかに問題となるのは普通話の /l/ と /n/ の２つが四川漢語では /n/ に合流している現象を十分考慮に入れていない点であろう．四川漢語における /n/ は [n] と [l] を弁別しないだけでなく，実際の音声実現にも [n] と [l] が互いに自由変異の関係にある．音写漢字との関連で考えると，これらの音声的変異は当然考慮されなければならない．

しかしながら，以上に述べたことはよく知られていて，西田・孫[1990]の他の《譯語》の考察で指摘されている箇所もある．ただし，以上の２つの自由変異以外に四川漢語 /n/ が許容しうる実際の音価に含まれる特徴的な音声上の自由変異については，あまり知られていない．実際のところ，筆者が観察してきた数地点の四川漢語の変種では，/n/ に対して [n, l, ^{n}d, n^{d}, ^{ɦ}d] といった変異音が含まれているのである．(6)

一方チベット語では，カムチベット語二十四村方言群に限らなくとも，多くの方言が /n/（代表音 [n]），/l/（代表音 [l]），/^{n}d/（代表音 [^{n}d]），/^{ɦ}d/（代表音 [^{ɦ}d]）が対立していて，これらすべての音声実現に対し漢語話者は漢語の体系として /n/ の変異と認識し，表記上の区別もまたできなかった可能性がある．この観点から考えると，西田・孫 [1990] が《木坪譯語》で特別な形式と指摘したいくつかの語は，現代のチベット語二十四村方言群の形式を参照してより適切かつチベット語として自然な対応形式を示しうることを示すことができる．

まず，前鼻音つきの形式が推定されうる例をあげる．その際，西田・孫[1990]の示した再構形式を添えられるものは添え，ここでの再構結果との異なりを示す．

---

(6) 同様の音声の自由変異を含むことは，/m/ や /ŋ/ などの鼻音声母にも共通する現象である．

川六 / 漢字音	川六 / 蔵文	再構形式	語義	現代語例	西田・孫 [1990]
訥 ne	'don	*^{N}de	読む	$^{-n}$de: (sP)	
猓 no	mda'	*^{N}do	矢	$^{-n}$do (dG)	*lo
列 nie	'bras	*^{N}ɖe	米	^{ᵑ}ɖi: (So)	*re
溜 niəu	'brug	*^{N}ɖɯ	雷	_^{n}ɖɯɣ (So)	*riu
莫 mo	'bo	*^{N}bo	斗		
俄班 ŋo pan	mgo dpon	*^{N}go paN	頭目		
虐 nyo	mgyog	*^{N}dʑo	急ぐ	^{ᵑ}dʑo: (sP)	

以上に与えられた推定形式は，現代チベット語の形式ともよく合うものが多く，妥当性を得られるものと考える．現代語で確認することができない語についても，蔵文との対応関係から推測して前鼻音を含む形式を推定することは容易である．西田・孫[1990]では，おそらく北京音を用い現代チベット語の情報がないまま推定を行って特別な形式が見られると分析するが，四川漢語音を用いるとそのような特別な形式を設定する必要性はなくなる．

ところが，決して前鼻音が期待されないところにも鼻音声母の漢字で音写されている場合がある．たとえば「石」に対して「魯 no」(蔵文 *rdo*)，「蜂蜜」に対して「洛済 no tɕi」(蔵文 *sbrang rtsi*) などである．これらを筆者は以下のように考える．

川六 /漢字音	川六 / 蔵文	再構形式	語義	現代語例	西田・孫[1990]
魯 no	rdo	*^{H}do	石	^{ʌɦ}də ^{ɦ}da (So)	*lu
洛済 no tɕi	sbrang rtsi	*^{H}ɖo tsi	蜂蜜	^{ʌɦ}ɖõ ^{h}tsə (dG)	*ro tɕi
業 nie	brgyad	*^{H}dʑe	8	$^{-}$dʑaʔ (So)	
龍莫 noŋ mo	sdong po	*^{H}doN ^{N}bo	木		

再構形式には前鼻音ではなく，前気音を推定した．現代のカムチベット語では，以上の語の初頭に前気音を伴うものが数多くある[7]．前気音も前鼻音と同様，閉鎖音の前に継続的な声帯振動があり，また，有声音に先行する前鼻音と前気音が入れ替わる現象がいくつかのチベット語方言で確認されている[8]．この点に着目して，２つの可能性が指摘できる．１つは，《木坪譯語》記録言語の側で前気音と前鼻音の発音上の混同が起こったこと，もう１つは音写者の漢語の体系で前気音と前鼻音の弁別ができず，前気音を前鼻音と解釈してしまったことである．いずれにせよ前気音は漢語の音体系で音写できる音声ではないと考えられるから，この推定は蔵文と現代チベット語方言の情報によることで解決されうる．

次に，蔵文足字 r 対応形式が，実際に r を含む子音連続を構成していたことを示す例が存在する．このような音写は《木坪譯語》および《打箭爐譯語》に見られる．この形式は現代語ではほぼ確認されないが，sProsnang 方言にのみ対応形式が見られる．

川六 / 漢字音	川六 / 蔵文	再構形式	語義	現代語例
不里 pu ni	bri	*pri	書く	ˊprə mə (sP)
撥柳午 po niəu u	spre'u	*prɯ wu	猿	ˉʔa ʰpri: (sP)
崩耳 pən ɚ	sprin	*prəɴ	雲	ˋʰpri (sP)

なお，「雲」の例について西田・孫[1990]は北京音の r 化音の性質を考慮して *prə を推定しているが，四川漢語では第１字の音節末鼻音は脱落しない．

(7) 上例「木」に対応する形式は，現代の丹巴県のチベット語には伝承されていないが，蔵文で記録される *sdong po* は文語に見られるし，他の地域の口語にも見られる形式であるため，蔵文と漢字音写の対応関係から前気音を再構できる．

(8) たとえば Sagong 方言の「飛ぶ」ˋʱdī の初頭子音に対して [ʱd, ⁿd] など．方言間の対応では，「吹く」rGyalthang（香格里拉）方言ˋᵐ̥puʔ に対し Nyishe（尼西）方言 -ʰpvʔ といった例がある．

しかし，現代の (sP) (So) (dG) のいずれの方言でも鼻音要素が脱落していることを考えると，むしろ先行研究の与える *prə の形式の方が二十四村方言群に一致する．

以上に議論した鼻音の取り扱いと蔵文足字 r 対応形式の現れを参考にすると，以下の例は初頭の 3 子音連続を示しうる．

川六 / 漢字音	川六 / 蔵文	再構形式	語義	現代語例	西田・孫 [1990]
木耳 mo ɚ	sbrul	*^{N}brə	蛇	^{ɴ}dɨ: (So)	mul

この例の第 2 の漢字「耳」は，語末の *-l を表した可能性もあるが，蔵文との対応関係において，足字 r が脱落する例が《木坪譯語》の例の中に見当たらないため，その平行性を重視してわたり音 *-r- を推定した．このとき「蛇」の蔵文には鼻音要素が存在しないが，rNgawa (中阿壩) 方言に ^{m}dɯ という口語形式が存在するなど，複数の方言で前鼻音が存在していることから，《木坪譯語》に記録される方言にも鼻音要素が存在したかも知れない．

次の例では，母音と音節末の形式に注目する．

川六 / 漢字音	川六 / 蔵文	再構形式	語義	現代語例	西田・孫 [1990]
公罷 koŋ pa	rkang pa	*koɴ pa	足	$^{-h}$kɔ̃ βə (sP)	*kung pa
空罷 k^{h}oŋ pa	khang pa	*k^{h}oɴ pa	家	$^{-}$k^{h}õ bo (So)	*k^{h}ung pa

西田・孫 [1990] は漢字音との関連において，蔵文 -ang に対応する形式に音写漢字から -uŋ を再構できることに注目しているが，これも漢字音が北京音では -uŋ であるのに対し，四川音では -oŋ であることから，推定を *-oɴ として蔵文 -ang : 推定 *-oɴ の対応関係を得ることができ，この対応は現代カムチベット語方言の多くの事例と一致している．

3.2.2 語彙的特徴

蔵文に一致する形式が記録されているが語義が一致せず，口語の語義に一致する例である．

川六 / 漢字音	川六 / 蔵文	再構形式	語義	現代語例
哈巴 xa pa	lhags pa	*l̥a pa	霜	ˉl̥ɑ: βə (sP)

蔵文 *lhags pa* の文語での語義は「風」であるが，現代の丹巴県の方言では一律に「霜」という語義で用いられている．《木坪譯語》の形式は語義の面で口語に一致を見せているといえる．

次の例も，蔵文と漢字音写の示している語が別のものであると見られるが，対応形式がチベット語の口語形式にのみ見られる．

川六 / 漢字音	川六 / 蔵文	再構形式	語義	現代語例
呢麻納 ni ma na	nyi ma nub	*n̥i ma l̥a	日が沈む	ˊn̥i mo ˋʔma l̥ɑʔ (dG)

《木坪譯語》に記録される蔵文は標準的な文語の形式であるが，これと音写漢字の第3字はうまく対応しない．しかしながら，現代 dGudzong 方言の形式の4音節めは漢字音写の特徴に合致する(9)．

次の例の漢字音写に含まれる末尾鼻音は，口語形式に一致する．

川六 / 漢字音	川六 / 蔵文	再構形式	語義	現代語例
仰 niaŋ	nya	*n̥aɴ	魚	ˊn̥ɔ̃ (So)

(9) この例における「沈む」に対応する形式は，方角の「西」と同形で，《木坪譯語》の「西」も漢字「納」で音写されている．ところが，現代 Sogpho 方言および現代 dGudzong 方言には，方角名が存在しないため，その語形式は対照できない．ここに推定した結果から考えると，「西」も *l̥a となり，極めて特異な形式を持っていると判断できる．

次の例は，漢字2音節でチベット語1音節を表していると考えられる．

川六 / 漢字音	川六 / 蔵文	再構形式	語義	現代語例
不噹 pu tʂʰaŋ	brang	*ᴾtaɴ	胸	ˊᴾto ʱɟeʔ (So)

この例は，《木坪譯語》では蔵文 Pr- に対してそり舌閉鎖音やわたり音に r を含む形式で対応している中で，唯一異なった対応を示している．この形式は，現代 Sogpho 方言などが示しているように，初頭子音が子音連続で現れている．また，sProsnang 方言では，異なる例ではあるが，「子供」(蔵文 *phrug*) について口語形式として ˉpʰriʔ と ˉᴾtʂʰiʔ の2つを許容する．このような音声実現の対応と比較することで，この例の漢字音写は明確に初頭に両唇閉鎖音を伴う子音連続を音写していると推定できる．

次の例は，蔵文のつづり通りの発音が漢字音写に示され，かつ口語形式が丹巴県の方言に限定的に見られる例である．

川六 / 漢字音	川六 / 蔵文	再構形式	語義	現代語例
耳奔 ɚ pən	ri bong	*rə poɴ	うさぎ	ˆrə βu: (sP), ˆrə mõ (So)

「うさぎ」という語は，多くの方言では第2音節の初頭子音が軟口蓋音で現れ，以上のような対応を示すのは丹巴県の方言などに限定的に見られる．

次の例は，有気と無気の異なりが表れている．

川六 / 漢字音	川六 / 蔵文	再構形式	語義	現代語例
濯 tʂo	khyod	*to	あなた	ˉtʰɑʔ (So)

2人称代名詞がそり舌音で現れるのは，現在の調査状況ではSogpho方言に限られる．一般にSogpho方言の形式では初頭子音は有気音で現れ，ˉʈʰɑʔとなるけれども，しばしば音声的に無気音で現れることが確認されている．

次の例は，これまでに挙げたものとは逆に，《木坪譯語》に記録される蔵文の形式が特異な特徴を示しているものである．

川六 / 漢字音	川六 / 蔵文	再構形式	語義	現代語例
業撑 nie tʂʰən	'ja' mtshon	*ᴺdʑe ʈʰəɴ	虹	_ⁿdʑa (So)

「虹」は蔵文では一般に *'ja' tshon* と書かれるが，《木坪譯語》では第2字の初頭にm-を伴っている．これはおそらく音写漢字には反映されていない要素であると判断するが，Sogpho方言の西方に分布するLhagang方言では，現代でもなおˆⁿdʑaɦ ᵐ̥tsʰoと発音する[鈴木2006a]ことから，もしかすると18世紀木坪チベット語にも何らかの対応形式があったのではないかと疑える例である．

次の例は西田・孫[1990]も例外形式と認めているが，やはり例外形式である可能性が高い．

川六 / 漢字音	川六 / 蔵文	再構形式	語義
別 pie	bya	*pje	鶏

この「鶏」はギャロン語にみられる形式と大きく変わらない[10]．これはギャロン語である可能性がある．ただし，dGudzong方言の「鳥」はˊpiʰkaで，第1音節の形式に似ている．

(10) 現在の宝興県で話されるギャロン語は四土ギャロン語の一種と考えられるが，その一種であるChuchen-shar（金川河東）方言ではpjeという形式がある．

3.3 西田・孫 [1990] が指摘するその他の特徴

以上，現代のチベット語二十四村方言の特異性に《木坪譯語》に記録される形式がよく一致する点を中心に述べてきた．西田・孫[1990:30-32]には，以上に述べた点以外にも《木坪譯語》記録言語の若干の特徴について言及がある．それについてここで簡単に述べておく．

蔵文 Ky- には前部硬口蓋破擦音を当てている点や，蔵文 -ab の対応形式に *au が現れる点などもまた現代カムチベット語方言の事例と一致している．蔵文 sl, gl に *l̥, *l が現れるのも決して際立つ特徴ではなく一般的な特徴である．蔵文 sr に *s と *ʂ 両方が対応することがあるのは二十四村方言にも見られる特徴である．

また，「心」に与えられる「生母」と「3」に与えられる「生」というそれぞれの音写形式は，これも四川漢語の読みを適用すれば，前者の音写形式には *sən ^{N}bo もしくは *səm，後者のものには *sən が推定でき，まったく特殊な形式を示してはいない．

以上，西田・孫[1990:30-32]が指摘する特徴的な形式のうち説明の与えられるものを簡潔に述べてきたが，ほかに指摘される「友人」に与えられる「當出」という音写や「比丘」に与えられる「達母」という音写は，現代語の資料の中にも見出すことができない形式であった．よって，具体的にはどういった形式であったか現段階では検証できない．

4《木坪譯語》に現代の丹巴県のチベット語方言が記録された事情

前節に述べた《木坪譯語》の記録言語の具体例から，この言語が現代チベット語二十四村方言に極めて近い関係にある方言であることには疑いがない．ここで序文に戻って考えるべき点がある．

《木坪譯語》は穆坪董卜韓胡宣慰司の管轄下にある村落において通用している言語を記録したものであるということであるが，現代の同地域に居住するチベット族はギャロン語を話している．この地域が「ギャロン 18 土司」

の1つであったという点から考えれば，ギャロン語が通用していることの方が自然であるように見えるが，丹巴県の事例もあるように，ギャロン地域の中でもチベット語を母語とする人々が存在した可能性は否定できない．際立つ点は，チベット語が現在では分布しなくなってギャロン語が今なお話され続けているということである．対照的な事例として，丹巴県の西方すなわち伝統的にはムニャと呼ばれている地域では，過去には広く分布していたといわれるムニャ語について，現在ではチベット語の分布が拡大しムニャ語の分布地域が縮小しているという現象がある．チベット語は一般的に社会的上位言語としてより機能性の高いものであると見られているが，《木坪譯語》の記録言語と当地の言語分布状況を考えると，この地域ではチベット語のほうが失われたことになる．これはもちろん，同地域の民族分布も大きく変わり，チベット人の居住数が大幅に減少していることとも関連しているだろうが，そうであるならギャロン語がなお分布しているという点が一層際立つ．

西田・孫 [1990:11] における孫氏の言及には，《木坪譯語》の記録言語は木坪の統治者層のチベット人の言語を記録したとあり，ギャロン語話者の言語を記録しなかったという．そうであるなら土着のチベット人の話す言語と統治者層では異なる言語を話しているということになる[11]．この点について，木坪の統治者層がどの地域からやってきたチベット人であるかについて文献調査が必要となってくるが，記録言語との関連において，丹巴県のチベット語を話すチベット人との近い関係を想定することができるかもしれない．という

(11) 格勒 [2006:312] では，木坪の土司とその領地の人々はギャロン人に属するということに言及している．つまり，土司と土着民も同一民族であると考えられている．しかしながら，ギャロンと呼ばれる人々が必ずしもギャロン語を話さないのは現代の事情からも容易に推測される．たとえば現在の丹巴県では，ギャロン人の中にはギャロン語のほかゲシツァ語および本稿で議論に用いたチベット語二十四村方言の話者がそれぞれ存在する．

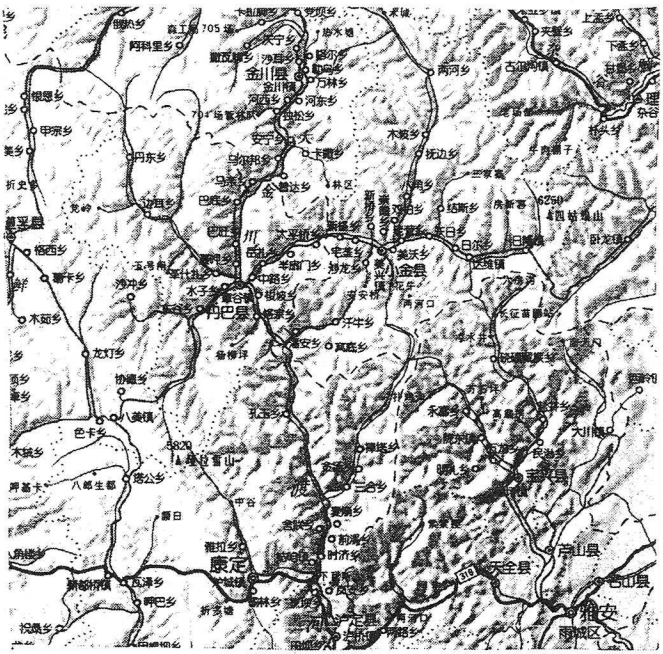
のも，言語の観点から見ると，丹巴県のチベット語二十四村方言はカムチベット語の中でも極めて特徴的な方言で，現代語の共時的分析からこの方言群はカムチベット語方言の中で独立した下位方言群を形成するものであることが分かっている．そして，その分布がチベット文化圏の末端に位置していることから，孤立的な方言群であると見られている．ところが，丹巴県の東方にあたる木坪において二十四村方言と同様の方言が分布していたということは，この方言群が過去には現代より広い範囲で用いられていたものであるということを示している．実際，二十四村方言に見られる特異な形式は散発的に「ギャロン 18 土司」の地域に見られる少数言語の中の借用語の形式にも見られる．現代の二十四村方言の分布状況では単なる孤立的な方言と分析されるが，過去には「ギャロン 18 土司」の南部の広範囲にわたって通用していたという可能性が指摘できるだろう．

5 まとめ

本稿では，丁種本《西番譯語》〈川六〉すなわち《木坪譯語》における記録言語について，西田・孫[1990:30-32]の考察を参考にしつつ，現代チベット語方言との対応という関係から分析しなおした．その結果，《木坪譯語》記録言語は現代の丹巴県で話される極めて特徴的なカムチベット語二十四村方言に非常に近い関係にあるチベット語方言であることが判明した．そして，同書に提示される推定形式の問題点について，特に音写漢字の読みに四川漢語を当てることによってその大部分を解決することができた．筆者の分析では，特別な基層を考えず純粋なチベット語の形式として処理できるという点に強調を置くことができる．ただし本稿で示した 18 世紀木坪チベット語の形式が適切であるかどうかは現在となっては確かめることができないし，西田・孫[1990:30-32]のいう特別の単語形式が存在した可能性も否定できない．筆者の推定する形式の方が，現代語との対応関係という点において，より妥当性があると判断できる程度に過ぎない．

この分析によって，《木坪譯語》が記録した言語の分布地域である 18 世紀の穆坪董卜韓胡宣慰司の管轄地域には，丹巴県の二十四村方言によく似た特徴を持つ方言が分布していたということが明らかになった．穆坪董卜韓胡宣慰司はそもそもギャロンの地域であるが，このチベット語方言の分布が意味するところはより深く穆坪董卜韓胡宣慰司の歴史を研究することによっても考察される必要がある．

現代の宝興県一帯の地図



中国国家地理雑誌社編 [2004]《中国国家地理 第 7 期 大香格里拉専輯》付録地図より

参考文献

鈴木博之［2005］「チベット語丹巴・梭坡 [Sogpho] 方言の音声分析」『ニダバ』第 34 号, 96-104

――――［2006a］「チベット語塔公 [Lhagang] 方言の方言特徴とその背景」『ニダバ』第 35 号，39-47

――――［2006b］《九香線上的藏語方言對比研究》第 4 届両岸三地藏緬語族語言學學術専題討論會發表論文

西田龍雄［1963］「十六世紀における西康省チベット語天全方言について ―― 漢語・チベット語単語集いわゆる丙種本『西番館譯語』の研究 ――」『京都大学文学部研究紀要』第 7 号，85-174

――――［1970］『西番館譯語の研究 ―― チベット言語學序説 ――』松香堂

――――［1973］『多続譯語の研究 ―― 新言語トス語の構造と系統 ――』松香堂

――――［2002］『アジア古代文字の解読』中央公論新社

西田龍雄・孫宏開［1990］『白馬譯語の研究 ―― 白馬語の構造と系統 ――』松香堂

Sun, Jackson T.-S. [2003] Phonological Profile of Zhongu: A New Tibetan Dialect of Northern Sichuan, in: *Language and Linguistics* 4.4, 769-836

Suzuki, Hiroyuki [2005] *Dialectological subgroup of Sogpho (Danba) Tibetan*, unpublished manuscript presented at 11th HLS (Bangkok)

馮蒸［1981］〈《華夷譯語》調查記〉《文物》1981 年第 2 期，57-68

格勒 (dGe-legs)［2006］《藏族早期歷史與文化》商務印書館

龔蔭［1992］《中国土司制度》雲南民族出版社

雀丹［1995］《嘉絨藏族史誌》民族出版社

四川省《宝興県誌》編纂委員會［2000］《宝興県誌》文史出版社

楊嘉銘［2005］〈解読"嘉戎"〉《康定民族師範高等専科學校學報》2005 年第 3 期，1-5

楊時逢［1984］《四川方言調查報告》中央研究院歷史語言研究所

Zusammenfassung:

Eigentümlichkeit des in *Xifan Yiyu* Nr. 6 verzeichneten Tibetischen von Muping

Hiroyuki SUZUKI

Die im *Xifan Yiyu* Nr. 6, dem sogenannten *Muping Yiyu*, verzeichnete Sprache ist zum erstenmal von Nishida & Sun [1990] untersucht worden, und es stellte sich heraus, dass diese Sprache eine tibetische Mundart ist, die im 18. Jahrhundert auf dem Gebiet der heutigen Präfektur Baoxing gesprochen wurde.

Diese Abhandlung klärt die mundartliche Klassifikation des im *Muping Yiyu* verzeichneten Tibetischen anhand des Materials der modernen tibetischen Mundarten auf. In ihrer kurzen Analyse wiesen Nishida & Sun [1990] bereits auf die Besonderheiten dieser Sprache hin. Diese Analyse enthält jedoch neben authentischen Beobachtungen auch einige Fehler. Aufgrund des Mangels an Material über die modernen tibetischen Mundarten analysierten Nishida & Sun [1990] den im *Muping Yiyu* verzeichneten Dialekt nicht gründlich genug, außerdem betrachteten sie das phonologische System der die Aussprache des Tibetischen wiedergebenden chinesischen Zeichen fälschlich als das des Chinesischen von Peking.

In Anbetracht der Tatsache, dass das *Muping Yiyu* von chinesischen Beamten aus Sichuan herausgegeben wurde, benutze ich das moderne Chinesische von Sichuan, um die Schriftzeichen des *Muping Yiyu* zu lesen, und analysiere die darin verzeichneten Wortformen auch noch mit Hilfe des Materials der modernen tibetischen Mundarten, die für die Aufklärung über die mundartliche Klassifikation notwendig sind.

Als Folge der Analyse dieser Abhandlung stellt es sich heraus, dass die Sprache des *Muping Yiyu* mit der heute in der Präfektur Danba (im Nordwesten von Baoxing) gesprochenen besonderen tibetischen Mundart "Vierundzwanzig-Dörfer-Dialekt" in äußerst naher Verbindung steht, und dass der größte Teil der Formen, die Nishida & Sun [1990] als Besonderheit betrachteten, der modernen tibetischen Mundart von Danba entspricht.